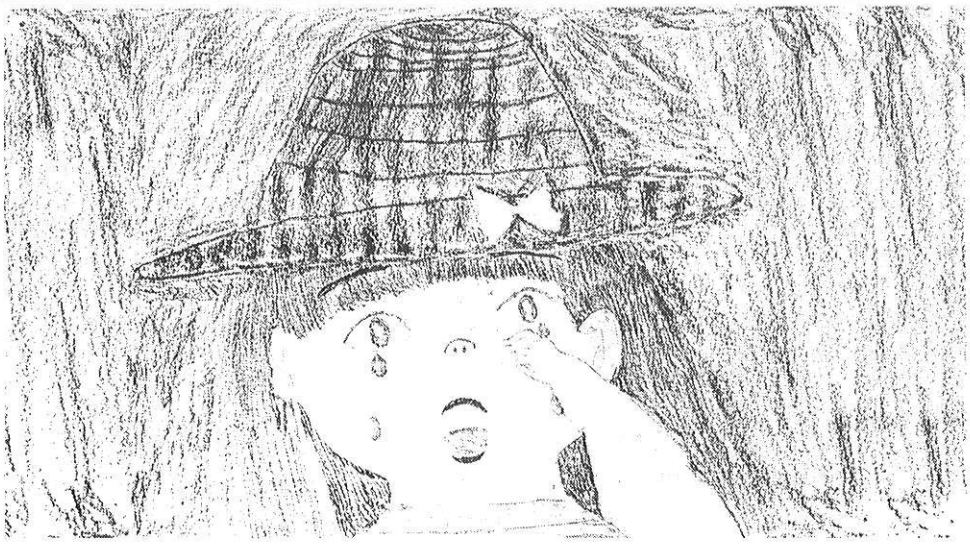
ひかりのこ　互いに重荷を負い合いなさい。　昭和62年7月1日　第 13 号

光の子

発行／社会福祉法人光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480－72－3883
振替　東京3－128022
印刷　（株）ドモン企画

暑中お見舞申し上げます。

社会福祉法人 光の子どもの家



おかあさん　五年　畠　実代

『自然』に愛されて

第一ヨハネ四・一〇

理事長　福島　勲

課せられた人生の務めを、自分なりに果たし終えたつもりで、山の中に住むようになった。

世捨て人の心境である。

ところが大変な言葉に遭遇した。

それは、高見沢潤子さんの書かれたものを読んでいたら、実兄の小林秀雄の言葉に「人はこの世に動かされつつこの世を捨てる事はできない。この世を捨てようと希うことは出来ない。世捨て人とは世を捨てた人ではない、世が捨てた人である。」というのがあった。

これにはひどく衝撃をうけた。自分がこの世を避けたつもりだったが、この世がわたしを追放したのだ。この世はもう自分を必要としない。この世には価値のない不要の者だということである。

言われてみると確かにその趣きがあると思われる。この観点からすれば山中の住人じゃなくても、市井に多くの世に捨てられた人がいるようにも思う。

唐の詩人李白に人が問う。どうして山中などに住むのですかと。李白は笑って答えず、しかし心のどかであり、世間にはない別天地があるとうたっている。

世間にはない別天地を自分なりに味い、私の生活を支えてくれるエトワスがなければならない。でないと私は人から捨てられてしまうのだ。しかし、つきつめて言えば、人に捨てられようが、人を捨てようが、本当にこの世を捨てた者にはどちらでもよいことである。

だのに自分の納得できる存在意義とか確立とか言っているうちは矢張りこの世を捨て切れてはいないのである。してみれば自分の依ってもって立つものを見出さないではまことにみじめな存在といわなければならない。

聖書にはわれわれが神を愛したのではなくて、神がまずわれわれを愛されたとある。（第1ヨハネ・4・10）先行する神の愛が自分

のものになっていない信仰は不安定である。

私は自然が好きであるということの背後に、自然がわたしを愛しているという感覚を深く体得することによって、山中の生活を意義づけることができよう。

教えられて囲をし、枯葉を集めて根元に積み上げておいたウドが春ともなれば、白く太い芽が、恥らうかのように先の方を赤くして枯葉の間からのぞいている。

早速掘って食卓にのせる。時あたかも受難週である。受難週にこんなにおいしいものをいただいてと家内はいぶかう態である。

いいよ、神が自然を通して、われわれにだけ与えて下さった恵みなんだと、わたしは訳のわからない解説をして舌つづみを打った。

われわれの施設は大利根の広い田圃の中に立っているが、決して世から隔離されたものでも追放されたのでもない。

自然の恵みの中で、子どもたちの次の人生へ強く逞しくはばたくための知恵と力とを培っているのである。

我が分身の友として

施設長　今関　公雄

光の子どもの家には、日常的に親と共に暮らし、家庭で育つことの困難な子どもたちが入所してきます。開設以来、共に暮らすことが困難になった家庭の事情などを目のあたりにして、子どもと私の関係を考えさせられています。

入所当初の事情・理由などは、親の無責任と見える、離別・行方不明・長期入院などが殆どです。現在、養護施設で暮らしている四万人弱の子どもたちは、全児童数に比して絶対的少数者であります。

しかし、数量的には極少であっても、当事者にとっては、百パーセントの人間的な存在状況であるところに福祉の原点があります。また、誰が福祉施設に入所を望み願う者がありましょうか。

子どもには罪がないということは、例えば光の子どもの家の開設に反対した人々でさえ認める見解であり、共感するところであります。更に子どもたちの存在は誰とも代えられないかけ替えのない生命であるという人間観が、福祉援助の対象者理解を促します。

子どもたちの暮らしている現場での経験により、援助を必要としている人々への理解に、もうひとつ別な角度からの接近が必要であると考えはじめています。子どもの暮らしを考える時、どうしても親の暮らしを考えないわけにはいきません。家庭生活の崩壊と養育困難に至る社会的要因の考察とその親の存在への共感的・運命共有的な理解が求められるからです。

親の大多数が、過疎といわれる地域から中学卒業時点で首都圏へ就労している事実を直視するとき、そのような個人を無力にしてしまうような社会的状況に思い至ります。農業から工業への急激な産業構造の変化、オイル価格などの激変と国際情勢の流動、ハイテクノロジーの急激な展開が、相対的に労働人口の過剰を生み、不安定現業労働者を直撃してきました。この社会の繁栄をその基底で支え、劣悪な条件で働く不安定現業労働者であることを担った親たちが、その破局として愛する子どもの施設委託に至ったと考えられます。

何故彼らがそのような苛酷で不遇の運命を負い、私がそうではないのか。何故私が過疎地域に生まれず、初めから全ての意味で有利と思われる首都圏に生まれたのか。当然私が担わなければならない運命を彼が担ったのかも知れない、という共感的・運命共有的な人間観が生起するのです。

こう思う時、単に自己責任の原則による優勝劣敗と適者生存の社会淘汰論を新たに超える厳粛な人間理解に到達すると思われます。

具体的現象としては、社会的制度としての福祉権を行使する親や子どもですが、その究極では、わが分身として私の前に立っているのではないか。このとき、汝と我の人間的連帯の絆を実感するのです。我が苦悩を代って担い続ける分身の友よ、分かち合いつつ共に生き、共に育とう。

天丼断ち
—亡師・五所平之助のこと—

黛　執（俳人）

私に俳句の手ほどきをしてくれたのは、映画作家として名高い故五所平之助である。平之助は、映画の道に入る前、すでに二十歳そこそこで柏舟と号し、大正俳壇に名を馳せた俳人でもあった。

ふとした機縁で、この五所平之助を囲んだ小さな句会が私の町に生まれ、月に一度、先生は映画制作の合間を縫って指導にきて下さった。無報酬である。俳句は余技だから、というのがその理由であった。そんな先生のために、私たちは句会が終わるとささやかな宴席を設けるのを常とした。これがまた実に楽しいもので、私など不肖の弟子は、句会よりむしろ後の宴席の方が魅力で参加しているようなものだった。

あるとき宴も終わりかけたころ誰が注文したのか、天丼が並べられた。各々に好物と見え、今日の幹事は気がきいているぞ、などと言い合いながら一斉に箸を付けはじめたのだが、五所先生の箸が一向に動かない。

「先生、温かいうちに・・」

と、誰かが促すと、

「いや、天丼はずっと断っているのでね」

と申し訳なさそうな顔をするのであった。嫌いというなら判るが、断っているというのは尋常ではない。怪訝な顔つきになった句座の面々に向かって、先生は、

「私はメカケの子でね」

突然、ぽつんと呟いた。座がしんとなった。先生は遙かを見つめるような表情になり、それからの『天丼断ち』のいきさつを語りはじめたのである。

先生は、東京日本橋で手広く卸問屋を営む五所家の一子ではあったが、正出ではなかった。いわゆる妾腹の子として妾宅に生まれ育ったのである。五歳になったとき、五所家に男子がなかったため嫡子として正式に本家に引き取られることになった。むりやり実母から引き離されたばかりか、実母はこのとき何がしかの金を渡されて、母子の縁も断たれたのだという。

正式に嫡子を迎えた五所家ではその日、番頭から丁稚に至る数十名の使用人を集め、先生の好物である天丼を全員に振舞って披露の宴をはった。このときである。いきなり立ち上がった幼い先生は、狂ったようにわめきながら、ずらりと並んだ天丼を片っ端から踏みつぶし、蹴とばして廻ったのである。何とわめいたかは憶えていない、と先生は言った。

その後まもなく先生は、当時大流行した悪性のインフルエンザ『香港風邪』に罹り、手当てが遅れて生死の境をさまよった。うわごとで実母を呼び続けるので、さしもの父親も先生を実母の宅に送り看護を頼むほかはなかった。実母は久々に手元に帰った重篤のわが五所の看病に連日不寝の献身を続け、その甲斐あって先生は危機を脱し、五所家に戻された。ところがその不眠不休の看護がもとで、疲労しきった実母に先生のインフルエンザが感染、たちまち肺炎を併発して旬日の後に他界したという。

「母がねぇ、身代わりになったんですよ。以来、私は天丼を食べません。」

私たちの前に置かれた食べかけの天丼の、その後の味がどんなものであったかは、言うまでもないだろう。

私たちに話したことで何かがふっきれたのか、五所先生は、その後PTAなどから講演を頼まれると、若い母親たちを前にしてよくこの話をした。例外なく聴衆は涙をふり絞った。

なんとも感動的で哀しい話である。だが、私が最も心打たれるのは、悲話そのもの以上に、自分が妾腹であることをいささかも恥じなかった五所先生の態度である。その純粋無垢でひたすらな母への慕情である。

「伊豆の踊子」をはじめ、弱者としての女性への限りない愛を示す五所先生の底を流れるものは、この実母への慕情だったのではあるまいか。

☆ 第2回 児童福祉週間記念講演

就職児童を見つめて施設を想う

経堂憩いの家 施設長　広岡　知彦

光の子どもの家を訪問してから一ケ月以上経ちました。振り返って印象に残ったのは施設全体の若々しさでした。年令の若さもさることながら、精神的な面でのフレッシュさ、しなやかさはさわやかなものでした。新しく組織を作っているときの、理想と躍動感が感じ取れました。組織も人も、絶えざる新陳代謝は必要なのだという思いを新たにしました。歴史的な施設においても、絶えずニーズに応じた ― 子どもに沿った ― 施設衣替えをしていかなければ死んだ施設になってしまいます。個人としても、自分自身の中で絶えざる新陳代謝を行っていかなければ子どもに沿った養護は展開できないだろうと思います。光の子どもの家の実践は、新しく作り上げている強みでもありますが、子どもにより沿った本当の実践をどう展開していこうかという意気ごみを感じました。

光の子どもの家の子どもたちは、まだ最高学年が小学五年生だと聞いています。これから年を経るに従い、高年令児が増えてくることは容易に想像できます。よく聞く例ですが、小学校低学年の頃は成績はまあまあであったのが、高学年になるにつれて、どんどん成績が低下してくる子どもがいます。

十代に入り自意識が出はじめ、他人のことも批判的に見れる年令に達した時に、こういう現象が始まるのです。勉強するのがばかばかしくなり自分からすることを放棄してしまうのです。そのような気分に子どもたちを追いやってしまう施設の実践には、何かが不足しているのです。ひとり一人の心の動きを的確にとらえられなかった結果かも知れません。

私が思春期の子どもたちと一緒に暮らしていてよく思うことがあります。もっと小さい時に出会っていたら！十五歳からでは遅過ぎると。手に負えない状況を前に、責任転嫁しているのかなと自分に問うこともあるが、それにしても、と思えることが間々あります。

愛されたこと、愛を感じたことがあったのだろうかと思わせられる子どもに出会うことがあります自分はこの世の中でかけがえのないひとりの存在であることを感じることさえ出来なかったこどもたちです。そんなこどもに出会うのは、とても辛いことです。

信じてもよい大人もこの世の中にはいるのだと、子どもに感じとってもらうまでに、大変な労力を要します。最初の反応は、様々な〈ためし〉をしかけてきます。大人がどうでてくるかをじっと見ているのです。試される方が判断を間違うと、なかなか信頼関係をとり結べないことになります。このようなやりとりを思春期になってからするのはきついのです。もっと小さい時に、人間関係の大切さ子どもを裏切らない大人の存在を知っておいて欲しいのです。

また、人間関係を力関係で見る大変に対応の難しいタイプの子どももいます。

体罰は勿論深い不信感を子どもに植えつけますが、子ども同士、特に先輩・後輩の中で培われる力関係。これにはしばしば暴力的行為のあることが少なくありません自分が施設でそうやられてきた事を話す子どもは、しばしばやる側にまわった経験を持ち合わせている例が多く、力関係で人間関係を見るなと理解させるのは大変難しい事なのです。

施設での対応のまずさは、一人ひとりの動きに目が届いていないことに関係があります。もし、一貫した目が子どもに届いているならば、暴力を受け屈折した気持ちになっている子どもの態度から、事態を推測できない筈はないのです。子どもの方から訴える大人の存在がないのも寂しいものです。

前に学力の低下の問題を述べましたが、学力だけで子どもを判断してもらっては困るとも思っています。一人ひとりの子どもの持っている力は、学力に秀でている子どももいれば、芸術に秀でている子どももいる筈です。高校に進学

できなくても、働くことで実力を発揮する子どももいる筈です。持っている能力を引き出し、引き立ててあげるのも私たちの仕事ではないでしょうか。施設の方々に願うことは、進学できずに働かなければならない子どもたちに、劣等感を与えないように配慮して欲しいことです。高校進学だけが人生ではないのですから。

進学しなかった子どもにも、中卒でいきなり社会に出すのではなく、一年ぐらい施設に置いて社会性を身につけさせた後にしてあげる位のゆとりがあればと思います。複雑な家庭背景を持ち、これから殆ど一人で社会に経ち向かわなければならない子どもたちです。初めて働くことと、一人で生活しなければならないことが一緒にくることは、子どもたちにとって厳し過ぎます。一人ひとりを見るとその子どもなりに社会人になっていくテンポがある筈です。それを保証しつつ社会人になっていけたら素晴らしいことだと思います。

いくら施設で手をつくして社会に出してやっても、やはり社会の現実は厳しいのです。色々な困難にぶっつかり選択に迷うことも多い筈です。その時に、あの人に相談しよう、施設に帰ればという思いを持てる子どもは、どんなに幸せだろうと思います。その全ての基礎は、養護施設での大人との人格的交わりのなかで培われる信頼関係だと思うのです。施設の方々には、自分たちが為した養護実践の結果を見つめていく義務があると思います。例え関わった一人ひとりの子どもに手をかす事ができなくても、子どもの行末を思いやる気持ちを持って欲しいのです。その過程なしには次なる、新たな養護の展開はないと思います。

出会った以上子どもとは一生の付き合にならざるを得ないのです。

子育てとは一回しかない、反復の利かない創造的な仕事です。工場労働とは異なり、大量生産なども出来ない芸術的な仕事に近いと思います。条件の異る、個性的な子どもたちに考えられる養護方針が画一的なものに収まり切れる筈はありません。一人の子どもに対して、どうすればこの子を延ばす力になれるのだろうということを、考え抜いていく作業が養護だと思います。直接、心の柔らかい子どもたちの処遇に関わる仕事は、本当に大切な仕事だと思います。

施設にいる間に、家庭 ― 特に親との関係を子どもに整理させておいて欲しいということがあります。最悪のケースは、子どもが親のことを知りたくてウズウズしているのに、一切、親の情報を与えていないことがあります。結局は子ども自身が親を乗り越えなければ解決しないことが多いとしても親の問題をどう整理していくのかということは、子どもにとって実に大きな問題なのです。家庭と交流が可能な子どもは、それなりの家族との間合いの取り方を覚えていく必要があるのです。それを可能にしていくには、施設職員の力にかかっていると思います。

施設、特にアフターケァ施設などは、なければないに越したことはないのです。施設は必要悪なのです。施設がなくなる社会が私たちの究極の目標です。しかし、そのような社会が近いうちにくると予想できません。反対に、世の中はますます複雑になり、ニーズは深刻化し多様化していくと思います。ニーズがある以上、私たちはそれを解決するために全力を挙げてかからなければなりません。たまたまの出会いで知り合った子どもたちでも、知り合った以上は最後まで成長を見届けていく責任があります。力に限界があるとしても、子育ては限りはないということを肝に銘じておきましょう。

紅の国から　2

賞シール

小二　畠　準生

先生　あのね
きょう
しょうシールを　もらって
うれしかったです。
なんでか　おしえます。
ひかって　きらきら
するからです。
あしたも　もらえたら
いいです。

「ある保育園の日常から」

杉の子保育園園長　星野　勤

「子どもにとって自然とは何だろう」といったようなことを考えてみたい。とはいっても「子どもの自然観」や「自然体験」といった「心的」な世界の事などはとても考えきれるものでもないので、もう少し身近なところで話を進めるしか手はないのだけれど・・。

糸口として「紙オムツ」の事などから入ってみたいと思う。「生理用品」の素材の研究開発の応用として「高分子吸収体」なるものが「紙オムツ」に組入れられて、それまでは病人用や老人介護用に利用されるに過ぎなかったいわば業界用品が家庭向けに ― つまり赤ちゃん用として爆発的な売り上げを記録して、ついでに吸収体メーカーの株まで急上昇したのはつい数年前のことだが、子どもの世界のひとつである保育園にも紙オムツはどんどん浸透している。

保育園の毎日の中では、これまで通りの布オムツを使うところが殆ど（貸オムツという方法もあるが）だが、実は親たちもそれ（＝園では布オムツ）を望んでいるのも事実だ。寝る時と外出する時は紙オムツにしている家庭がどんどん増えていて、全て布オムツは少数派になりつつある。これらの激変の中で ―― 最も変わったのは先ず大人にとってであり、初めからそうでしかない子どもにとっては変化ではない ―― 子どもの自然にとって何が変わっただろう？

簡単なことだけれど、子どもにとって一番身近な自分の排泄物との出会い方が（体験が）大きく変わろうとしている事になるだろう。オシッコなら3～5回分は平気だと（宣伝では）言われる。ムレたりは多少するのだが、濡れた感じは大人の手で触った位では確かに殆どないのだ。ウンチともなれば布オムツの時とあまり違わないような気もするが、乳児の初めの頃ならそれも流動的でかなり吸収され、ベトついた感じはずいぶん少なくなる。これらは子どもの身体＝自然体験として一体どういう事なのだろう。＜生身＞である証としての自分のウンチ・オシッコにまみれつつ育つ以外になかった私たち ― 又それを世話してきた親たち ― 自身の育ちの世界に比べてどうなんだろうか？使用している親たちは、何故か「園では布オムツにして」という。（オムツは親が用意し、汚れたものは水洗いだけしておくと、親が持ち帰る）何かひっかかるのだが、これは一体何なのだろうか？

そうした中で確実に、保育園の親に限らず「ウンチの状態を見たり触ったりしない、したくない」「丸めてゴミ袋に入れるだけだから楽でいい」という話の通り、ウンチ・オシッコは既に「ゴミ」と化して＜生身＞の一部ではなくなりつつある事は確かだ。布オムツの場合はこうはいかない。洗う時シゲシゲ見る。色・粒々の混ざり物・食べ物の事・体調・そして手触りと臭い等々がどっと迫ってくる。「自分の子どものウンチは臭くない」という人もいるが中々そうもいかない。洗い方にもコツがあるが洗う場所も結構苦労する。子どもにも大人にも＜生身＞の事として存在してきた諸々の事が紙オムツによってたかだかゴミ処理の問題と化してしまった。もっとも都市生活ではとっくに排泄物はゴミの一部になってはいたが・・・。

ところで、子どもに人気のある絵本に『みんなウンチ』というのがある。色々な動物のウンチ等々が次々に登場してくる傑作であり＜人間＝クソ袋説＞を髣髴させるようなパンチもあり楽しい本だけど勿論当の子どもたちにとってはもう少し違ったもののようだが。

自分たちからどんどん遠ざかるものを「絵本」によって初めて体験する「疑似体験（シュミレーション）」という逆転がここでも進んでいる。

そういえば「園では布オムツ」という話も、失われつつある生身の体験を疑似的に保証しよう（シュミレート）とするあがき・・・のひとつに他ならないのかもしれない。どこまで進んでいくのだろうか。

現場から

三年目の保母の報告

石毛　照子

人が生きていくプロセスにおいて、何度か大切なスタートがあります。そのスタートでつまずいて遅れをとってしまうと、それを取り返すのに倍以上の時間とエネルギーをつかって努力しなければなりません。

子どもにとって小学校への入学は最も大きなスタートになります。その大事なスタートをスムースにできるように、それからの学校生活のなかでの成長と能力の発揮が充分できるようにと願いながら準備してきた筈でした。しかし、三歳を大きく過ぎる頃まで乳児院で過ごし、ここでも新米の保母に受け入れられた鷹ちゃんの場合、それはどうしても不充分なもので見切り発進でしかありませんでした。

緊張と不安に満ちた一年生。そんな状況を、そして心の動きを理解し対応することのできなかった担当者との関係のなかで、落ち着いて学習することのできない授業時間、幼稚園では何とかなっていた集団のなかでの約束ごとからはみ出してしまう突飛な振るまいなどなど・・。授業参観で愕然とさせられ、春の家庭訪問での担任の先生のお話で鷹ちゃんの危機的状況を例示されるに至って、最早猶予のないことをいやが上にも確認させられました。

緊急に関係者に集まってもらい状況の説明と対応策を話合いました。仲間たちの真剣な原因の追求のなかで、責任担当制の落とし穴であるセクショナリズムに陥っていた自分が浮かび上がってきました。担当者しか子どもに関われないような状況にのめり込んでいたのです。子どもにとって色々な人間関係があり、その役割や遠近感があることを経験させなければならなかったのに・・。今後の対応して、基本的な大人の関わり方をチェックして、具体的な方法までを確認し合いました。

学校の先生には何度も時間を割いていただいて、一つひとつの事柄についてご意見を伺いご相談にのって頂きました。先日「この頃少しづつですが変わってきました、成長していますよ」と言って励まして下さいました。お願いばかりの貧しい私どもの取り組みに、快く対応して頂き感謝しております。

今日も学校への四十分の道を元気に歩いていく鷹ちゃん。私の力の足りなさで大きな荷物を負わせてしまって。これから、一つひとつを反省し、よりよい対応にしようと思います。

この夏休みには、みんなと九十九里の海で、イッパイ遊んで、負った荷物をソッと捨ててこようね。

ここが開設して間もない頃、仲間の人の「私でなかったら、子どもたちはもっともっとよい関わりを持てただろう」と言ったことを思います。鷹ちゃんと出会ってから二年半を超えました。鷹ちゃんが生まれてから最も長い時間関わった人間に私はなってしまいました。今という大切な時間を私と関わって生きている子どもたち。子どもたちの所為で、私を選んだわけではないのです。だからこそ努力して、出会えたことが豊かになるようにと願いながら、焦りを感じてしまいます。

もう夏休みの計画も、個人別のも全体のも出来上がります。どんどん成長し続ける子どもたちを追いかける毎日です。

逸郎君は自転車にテントを積んでの旅を目ざして、暇があれば自転車を乗り回しています。

耀也君と珠弥ちゃんの兄妹も担当者離れ、それとも担当者の子離れ？のような時機にさしかかりました。大きく外の世界に、そして人々の中へ出ていきます。幼児から学童へと伸びゆくために。

この夏を、燃えあがり、輝いて、人々に熱と光を与えつづけている太陽のように、心と体を鍛えあげひと回り大きく成長する季節となれるように計画して、前傾姿勢でむかえます。

日誌抄

四月一日～六月十五日

四月一日　一九八七年度の事業計画、予算を全員で確認し、三回目の年度へ決意して歩み出る。

二～三日　日本キリスト教団西千葉教会高校生ワークキャンプに環境整備と人形劇などで職員も子どもも助け励まされました。

四日　地元町内の書道家篠崎秀雄氏が子どもたちに書道をボランティアで、この日から毎週。

七日　入学・入園祝・歓迎会。今年もがんばろう会を新しい制服ランドセルを待ちたねたように身につけて、嬉々として、緊張して決意表明をみんなが。

八日　小学校入学式。五名の新入生で一三名の学童になりました

一〇日　幼稚園入園式。五名の年中さんが新しく。園児一一名に

一四日　開設以来二人目の退所。離婚の夫婦がここで再会し、児童相談所等との連携による良い働きで三才の男の子が、もう一度やり直す両親の決意の中へ。

二六日　アップルクラブがチャリティ・バザーを東京で。感謝。

五月三日　児童福祉週間記念行事の第一回子どもまつりを実施。映画会・バーベキュウ・歌・踊りなどに、地域のお友だち・お父さんお母さん・西千葉教会有志の方々など、沢山来て下さり楽しい、美味しい一日でした。

七～八日　児童福祉週間記念事業第二回講演と懇談の集いを経堂憩の家の広岡知彦先生をお招きして、養護施設の現状と本来的なあり方・仕事・機能などについて、誠実で含蓄のあるお話と、胸襟を開いての懇談の機会に職員一同リフレッシュされました

九日　幼稚園遠足。お父さんお母さん担当者が一人にひとり付き添い、殊に楽しい日でした。

一一日　小学校授業参観。出られる親たちと担当者が手分けして

一三日　大利根藤幼稚園との情報交換と懇談会。一人ひとりの子どもへの思いやりと情熱に満ちた先生方との有意義な半日を。

一四・一八日　小学校の家庭訪問私たちの思いを超えた担任の先生方の熱っぽいとりくみの様子に圧倒されっぱなしでした。

一九日　H・Iくん緊急入所。ツルッとした無表情で外界からの侵入を防いでいるような二歳児である。原田家竹花保母がインテーク・ケァをしていく。

二三日　幼稚園・学童の夏休みに備えて、夏期行事委員会が発足

二六日　町内の農家でいつも子どもたち職員共々お世話になっている大塚東一・智津子ご夫妻に苺狩りに招かれる。感謝。

三一日　国際婦人福祉協会の助成による敷地境の土止め工事・地盤沈下による盛り土・植栽工事が竣工。見事な園庭に。感謝。

六月四日　食品・物品両目的倉庫の着工。神奈川の箕岡夕子氏のご厚志に心から感謝。

七日　いつも細かい心のこもる衣類をお送り下さっている神奈川の高橋恒子・足立まゆみさん、今度はピカピカの三輪車を二台も！先を競って枕木の舗道を乗り回す歓声が絶えません。感謝。

九日　夏休みの帰省や家族の動向を把握するための全在籍児童の家庭訪問を開始。　（くら）

反射光

暑中お見舞い申し上げます。空梅雨とは言え鬱陶しい暑さの中、いかがお過しでしょうか☆日本ソーシャルワーカー協会が、光の子どもの家問題に基本的な福祉問題として取り組み続けられています。福祉――特に施設・法人に関わる個人・団体が独自性を持つことと孤立しあうことの違いを判然とできないままに、社会的な課題や困難に孤立して対決しています。こんな状況を突破して、同労者として真に連帯していく状況を切り開く希望と励ましを受けています。☆長い間音信もなかった父や母がそれぞれの子どもたちに相次いで現れました小さな心に毎日膨らませたはち切れる思いが，突然実現し、泣いて逃げる子、暫く時間をかけて、やっと側に寄る子など親子関係の不思議さを思います。時間をかけて待ち、判断を急がない大切さも☆夏休みの準備に大車輪です。美しく、楽しい思い出と一回り大きく逞しく育ち、九月には大きくジャプ出来るよう願いながら。（哲）